

2024年度京都府委託

聞こえとコミュニケーションの
サポートセンター事業

報告集



発行者：社会福祉法人京都聴覚言語障害者福祉協会
京都府聴覚言語障害センター



目次

ご挨拶・事業説明	P1
聞こえとコミュニケーションの教室	P2・3
職場での聴覚障害者の合理的配慮を考える	P4・5
第6回京都府耳のことフェスタ	P6・7・8
数字で分かる！ 「聞こえに障害のある人もない人も共に暮らしやすい社会づくり事業」	P9





京都府聴覚言語障害センター
所長 今西和弘

このたびは、「2024年度京都府委託聞こえとコミュニケーションのサポートセンター事業報告集」をご覧いただきありがとうございます。

本事業は京都府の「言語としての手話の普及を進めるとともに聞こえに障害のある人となない人とが支え合う社会づくり条例」をもとに京都府から委託を受けて実施しております。

2024年4月1日障害者差別解消法が改正され、これまで、事業者（お店、会社、ボランティア団体等）は努力義務だった、合理的配慮（障害のある人と事業者が話し合い、障害のある人への配慮を行うこと）の提供が義務になりました。聞こえ方とコミュニケーション方法は個人によって様々です。その方が求める合理的配慮を提供するためにも、聞こえない、聞こえにくいことを正しく理解することが大切です。

2024年は1月に発生した能登半島地震、台風や豪雨による甚大な被害など自然災害が相次ぎました。改めて災害への備えの必要性や防災、災害発生時の情報保障のあり方についても考えていかなければなりません。

この報告集が聞こえない、聞こえにくいってどういうことなのか、また聴覚障害者の合理的配慮を考えるきっかけにいただけたら幸いです。結びに本事業実施にあたり、企画段階からご協力いただいた、京都府中途失聴・難聴者協会、京都府要約筆記サークル連絡会のみなさまに感謝申し上げます。

事業説明

聞こえとコミュニケーションのサポートセンター事業は、平成30年3月に制定された京都府「言語としての手話の普及を進めるとともに聞こえに障害のある人となない人とが支え合う社会づくり条例」に基づき、京都府内の中途失聴・難聴者を対象にして「聞こえに不便や不安があっても、安心して暮らせるまちづくり」をめざして行っている事業です。

中途失聴者・難聴者へのコミュニケーションの支援、補聴器やコミュニケーション支援機器の活用などの情報提供、学習や体験・交流を行い、聞こえに障害のある仲間づくりをすすめて、聞こえに障害のある方の社会参加を促進することを目的としています。

聞こえとコミュニケーションの教室（北部）

■ テーマ

講演：「補聴器の上手な使い方、選び方」

講師 つるた みのり 鶴田 美律氏（一般社団法人京都府言語聴覚士会）

参加者数

24名



京都市伏見区の耳鼻咽喉科大山医院にて、長年こどものきこえとことばの相談・検査・リハビリ、補聴器外来における適合検査や難聴児者の相談業務等を担当。その間、医療と並行して難聴児童の教育キャンプの実施、難聴青年の社会自立活動等にも力を注ぐ。

■ 内容

鶴田先生より、きこえの仕組み、補聴器を上手く使いこなすために必要なこと、最近の補聴器の動向等お話いただきました。
後半のグループワークでは、講義の感想や聞こえに関する困りごと等をシェアしました。

日時：2024年9月8日(日) 14時～16時（会場：綾部ものづくり交流館）



＜参加者満足度＞

満足	8人
やや満足	2人
どちらでもない	1人
やや不満	1人
不満	0人
無回答	12人

参加者の感想



◎今後補聴器が必要になった時、自分がどう行動していったらよいか、器具の種類などを教えてもらい良かったです。



◎講演を聞いて、改めて理解が深まり、知らなかったことをわかりやすく理解できました。



◎グループワークでの話し合いは良かったです。ただ、全体的にもう少し時間があればと思いました。難聴者の参加が少なく残念だと思いました。

実施後のフィードバック（鶴田先生より）

今年、耳鼻咽喉科の医師会日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会より「難聴啓発プロジェクト」がスタートしました。加齢性難聴を対象にした「8030運動80歳で30dBのきこえ補聴込みのキープ」を中心に、若者に多いヘッドフォン難聴等の予防、聞こえにくさを感じたらまず耳鼻科を受診するようにといった啓発運動です。それと同時に、難聴や補聴器の相談にのれる医師の育成が急ピッチで進められています。

医療機関における「聴覚リハビリ」は先天性難聴の乳幼児や、人工内耳の術後に実施されることが多いですが、中途失聴者、加齢性難聴者に不要というわけではありません。日常生活での会話がリハビリであることは間違いないのですが、言語聴覚士が適切な会話の機会を設定し「聴覚リハビリ」を実践する機関も、少しずつですが増えてきています。現段階ではまだ不十分な環境ですが、今がまさに変化の過程だと言えます。

聴覚障害を題材にしたドラマやアニメの普及、難聴が認知症のリスク要因であることが広く啓蒙される中で、「聴覚障害児・者への手立てが必要である」という社会の意識は浸透しつつあります。補聴器の普及や新しい性能の開発、音声文字認識の精度の向上などのハード面はこの10年で飛躍的に変化を遂げています。

一方で、一番肝心な「人の対応（力）」は10年前とさほど変わらないのではないのでしょうか。外国人が困って助けを求めると、多くの日本人が言葉は通じなくてもコミュニケーションをとり、あの手この手を使って一生懸命になりますよね。少しゆっくり話しかける、聞き返されたら言い回しを変えてみる、身振り手振りを大きく使う、嫌な顔をせず表情豊かに応答するなど、難聴の人にとっても非常に有効で必要な対応です。確かに時間は少しかかるかもしれませんが、ほんの少し手間をかけるだけで聞き取りや理解はアップします。

難聴は誰にでも起こりうる比較的身近な症状です。周囲の理解や具体的な対応方法が、より社会に浸透していくよう、みんなで声を上げていきましょう。

聞こえとコミュニケーションの教室（中・南部）

■ テーマ

講演：「実体験から学ぶ災害時の聴覚障害者支援」

■ 講師 ^{やはた}八幡 ^{たかし}隆司氏（NPO法人ゆめ風基金 事務局長）

参加者数

52名



知的障害者授産施設指導員を経て、「豊能障害者労働センター」設立にも関わる。1995年1月 兵庫県南部地震障害者救援本部を設立し、全国のネットワークの協力を得て阪神間の障害者支援にあたる。以降様々な災害支援に当たる。それらの経験から障害者市民防災提言集、防災ハンドブックなどを手がける。

2011年東日本大震災、2016年熊本地震、2018年の西日本豪雨でいち早く現地入りして支援し、令和6年度能登半島地震についても支援を進めた。現在ゆめ風基金理事・事務局長。

■ 内容

八幡先生より「令和6年能登半島地震」の特徴、5次避難所、D W A T（災害福祉派遣チーム）派遣、障害者施設の閉鎖と福祉避難所等や、聴覚障害者の支援や避難所で準備しておくべきものについてお話いただきました。グループワークでは、ワークシートに基づき、被災時の行動を議論しました。

<グループワークテーマ>

グループワーク
時間軸でBCPを考える

想定

1日前の9月22日（日）午前11時50分頃大規模災害（震度6強から7の大地震）が発生したとします。

電気、ガス、水道などのライフラインは途絶え、交通機関もマヒ状態。電話も不通。建物がところどころ崩れ、ブロック塀なども壊れている。信号も停止し、道路も渋滞している。

電話 3日後に通常に戻る

公共交通機関 バスは4日後に復旧、電車も一部区間を除き7日後に動き出す。

電気 1週間後に全面復旧

水道 2週間後に復旧

ガス 3週間後に復旧

①あなたは誰とどこにいましたか。

②揺れている間、どうやって身を守りますか？

③地震がいったんおさまりました。まず何をしますか？

④30分以内にすべきことは何ですか？

⑤地震発生後の1時間であなたは何をしますか？

⑥午後4時になりました。暗くなる前にしておくことは何ですか？

⑦午後6時暗くなり始めました。余震も続いています。あなたは今晚どこで寝泊まりしますか？

⑧電気もガスも止まっていますが、食事は何かとれそうですか？

⑨仮にあなたが近くの小学校の避難所に行ったとします。どんなことで困りそうですか？

中部

2024年9月23日（月・祝）

サンガスタジアム

参加者数：22名



<参加者満足度>

満足	10人
やや満足	5人
どちらでもない	2人
やや不満	0人
不満	0人
無回答	19人

南部

2024年9月7日（土）

ゆめりあうじ

参加者数：30名



<参加者満足度>

満足	14人
やや満足	8人
どちらでもない	0人
やや不満	0人
不満	0人
無回答	26人

参加者の感想

◎今まで大きな災害にあったことがなく、災害について深く考えることもなかったです。自分自身のことと考え、備えることの大切さを改めて考えさせられた。大変よい内容でした。

◎防災について考えていたが、具体的な状況でシミュレーションとして聞かれると、どうしていいかわからなかったです。具体的に考えるきっかけになりました。

実施後のフィードバック（八幡先生より）

（1）講演の補足

今回は特に聴覚障害者向けでしたが、被災時の障害者支援について福岡県大木町がくわしい冊子を出しています。

（2）当事者、支援者等に求めること

支援者は当事者によく話を聞くこと、当事者は自分の意思を支援者にしっかりと伝えることが基本です。できれば災害が起こる前によく話をしておくことで、災害時の準備ができると思います。

（3）アンケートへのフィードバック

防災グッズについて知りたいというアンケートについて、私はまずはトイレの準備だと思いますので、においを消して固める粉とごみ袋の準備が必要です。これもネットで「100回分 簡易トイレ 防災グッズ」とするに検索で商品が出てきます。またのその他の備蓄品は「災害 備蓄品」でネット検索すると様々な規格の商品一覧が出てきます。あとは個性として「自分だったらこれが絶対ないとだめ」と思われるものを自分たちで見つけることが大事です。

「職場での聴覚障害者の合理的配慮を考える」

■ 日程 2024年10月26日(土) (オンライン)

■ 内容

企画①ミニ講演

企画②企業実践報告

企画③当事者と企業の座談会「互いに働きやすい環境づくりのためにできること」

参加者数

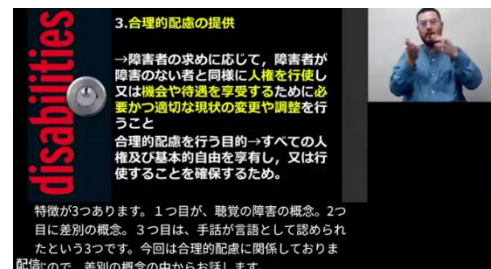
50名

■ 企画①ミニ講演 「合理的配慮を学ぶ」

講師：内川 大輔 氏（一般社団法人 京都府聴覚障害者協会）

合理的配慮についての解説がありました。また、当事者側と事業者側、お互いに確認をする必要があるもので、合理的配慮を求める具体的な中身や、どのような環境が必要か、ともに確認をして建設的な対話をする必要があるとの注意点も説明いただきました。

また、合理的配慮は「気遣いや心配り」ではなく、障害がある人が参加するための「合理的環境調整」という視点が重要とのまとめがありました。



■ 企画②企業実践報告

講師：森 麻里子 氏（京セラ株式会社 総務人事本部ダイバーシティ推進室DEI推進課）

京セラ株式会社の世界中の社員の性別、年齢、考え方、深い属性を考えてお互いに尊重して認め合うというD&Iの考え方だけでなく「公平性」の考え方をいれたDEIの考え方を部署の名称にし、より強化した取り組みを進めているというお話がありました。

また、WEB会議アプリの文字起こし機能や音声認識アプリの活用や、聴覚障害のある従業員およびサポートする従業員で「デフファミリー」という集団による手話の勉強会やミーティングに聴覚障害のある従業員の上司も参加することで、聴覚障害に対する理解の促進につながっているという聴覚障害従業員に対する取り組みについてご説明いただきました。



■ 企画③当事者と企業の座談会「互いに働きやすい環境づくりのためにできること」

内川 大輔 氏（司会・一般社団法人 京都府聴覚障害者協会）

森 麻里子 氏（京セラ株式会社 総務人事本部ダイバーシティ推進室DEI推進課）

西岡 保 氏（京都府中途失聴・難聴者協会）

荒谷 克巳 氏（名古屋難聴者・中途失聴者支援協会）

企画①②の講師に加えて企業に勤める当事者2名を含めた4名で座談会をしました。

森氏による話では、京セラ株式会社の一人の社員が入社してから変化があり、入社後に、自身の取扱説明書を準備し周りに説明された様子や、周りの聴覚障害者社員もコミュニケーションを待つのではなく自分について伝えることが大事だと理解が深まりデフファミリーの活動に非常にまとまりがでて活発になったと説明がありました。

また当事者として西岡氏が、共感を得て、同じ障害を持つ仲間と語り合う生活をしている中で、徐々に障害受容をできたとのこと自身の経験を踏まえてお話しいただきました。その話から森氏は「知ること」がすべてのスタートで、まずは話をしていただけるような環境を作ることが企業として努力する第一歩であり、それが合理的環境調整であると述べられました。



＜参加者満足度＞

満足	19人
やや満足	11人
どちらでもない	1人
やや不満	1人
不満	0人
無回答	18人

＜参加者内訳＞

関係者（家族・支援者）	8人
関係者（企業）	6人
当事者（手帳あり）	9人
当事者（手帳なし）	2人
無回答	25人

配信・画面構成協力
株式会社アステム

「職場での聴覚障害者の合理的配慮を考える」

参加者の感想



◎ミニ講演について、分かりやすい説明でした。合理的配慮は義務化されているがルールがなく、だからこそ話し合いが必要だと思いました。



◎京セラ株式会社の実践報告について、幅広くダイバーシティ相談室を設けていることに感銘を受けました。言っても大丈夫なのだという安心感があり、「知ることが全てのスタートだ」というお話が印象に残りました。



◎座談会で皆さんのお話を聞き、自分自身はどう相手に説明すれば、自身の様子が相手に伝わるのか。改めて自身を知ることに向けてみたいと思いました。

登壇者からのフィードバック

今回、下記感想についてピックアップし、フィードバックをいただきました。

みんなの幸せを願い、他人に対して思いやりのある障害者に育てる教育がないところでは社会は変わりません。自分の権利を主張し、他人の権利を侵害するようなあり方には賛同できません。合理的配慮は権利として認めますが、相手にもそれを断る権利があります。

障害者は相手の立場にも立っているのか？一体、何があればみんなが幸せになれるか？それを考える教育の必要性を感じています。

また、話の補足や当事者・企業に求めることについてもお話をお伺いしました。

内川氏

みんなの幸せを願い、他人に対して思いやりのあることは万人にとっても大切かと思います。「合理的配慮」は他人の権利を侵害することではありません。まず、同じスタートラインに立ち、障害のない人もある人も参加できる権利を行使する環境を整えていくことです。その環境を整えるためには何が必要か、という教育ならぜひとも展開していただきたいものです。

森氏

数名の方からコメントのあった、中途失聴者、難聴者に対するサポートについては、まだこれからだと感じました。ご指摘の通り、中途失聴・難聴の方が抱える悩みについての理解、当事者へのヒアリングも足りていないと思いますし、その他、今の京セラの体制は決して完璧ではなく、皆様からのフィードバックや対談でお聞きした内容は非常に参考になりました。今後も企業側ができることについて、考え続けていくことが、社員の働きがいに繋がっていくと思いますので、努力を怠らず取り組みを続けてまいります。

当事者または企業に求めることとして、聴覚障害者に限らず、障がい者全般、外国人、女性の管理職などその職場で初めて雇用する場合、最初の一人の時が一番難しさを感じると思います。できれば近くにもう一人いれば、職場の理解や受け入れ態勢は進んでいき、当事者の働きやすさもアップすると考えます。

荒谷氏

道徳の授業でこのような事が話し合えるようになるのが理想だと思いますが、教育カリキュラムを変えとなるとハードルが高すぎてなかなか実現できないと考えます。今回のようにやれることを地道にWeb発信でもよいので少しずつ世間への認知度を上げていき、あえて教育する必要がなくてもお互いに思いやることのできる社会、そんな社会になるのを祈って行動していきたいと思っています。

当事者または企業に求めることとして、多くの事例を知ることによって、自分に当てはめるヒントになるはずですので、多くの当事者に声をあげていただきたいです。会社規模、業種、職場等の環境が各々違いますので、合理的配慮にはこれだ！といった答えは出ないものと考えます。今回はあくまでも私の職場事例ということで捉えていただきたいと思います。

西岡氏

まとめて話した、あるべき姿に至るまでには、4つの階段を駆け上がる必要があります。第1段階として、障害受容、障害認識。自分を知り、相手に伝えて理解してもらうことです。第2段階はセルフアドボカシー、自己権利擁護の発信。自らの権利は自分で守るということで、強くなろうということです。第3段階は、対話です。学びあい、お互いに知る、そういったところで建設的対話をしながら、Win、Winの関係を構築する。第4段階、自己実現そして社会貢献をする中で共生社会を作っていくことができれば、一番よいのかなと考えています。まずは、第1段階の、自分を知り、それを相手に伝えていくことが、なかなか一歩踏み出せない人が多いなかで、今日の学びをきっかけに、当事者および社会や事業者側への働きかけも含めて取り組んでいく必要があるのかと考えています。

第6回京都府耳のことフェスタ&聴覚障害支援機器展

■ 日時：2025年2月1日（土）10時30分～15時00分

■ 場所：南丹市八木市民センター「iスタやぎ」

参加者数

180名

講演会場

■ 主催者挨拶（京都府健康福祉部参事 山田康之様）

■ 研究報告

「医療現場における聴覚障害者のコミュニケーション課題について」

芝垣 亮介 先生 (梶山女学園大学 教授)



<講師紹介>

2011年ロンドン大学博士（言語学）学位取得

南山大学准教授、マサチューセッツ工科大学客員准教授、立教大学准教授を経て2021年より現職。手話はジェスチャーなどの延長ではなく列記とした自然言語であり言語学者として常に関心の対象であった。そこにご縁があり、手話を介したコミュニケーションの研究に着手することに。福祉・医療の分野としてではなく言語学的かつ倫理的視座から貢献すべく研究を進める。

■ 内容

医療現場で利用できるコミュニケーション支援アプリの開発と普及についての研究報告をしていただきました。このアプリは、ろう者や難聴者だけでなく、外国籍の方や子供のいるお母さんなど、様々な人が使えるツールです。

厚生労働省の科学研究費を受託して研究を行っておられ、目的は、ろう者や難聴者のコミュニケーション環境を改善することです。聴者との比較研究も行い、全員を対象とした研究を進めておられます。最後に、技術はコミュニケーションの摩擦を減らすためのものではなく、補助するためのものです。情報保障が重要であり、より多くの方がアクセスできる環境を整えることが必要だとまとめがありました。

参加者感想



◎きこえのアプリは利用者あつての改善であり、経済効果も高くなる話は共感できました。



◎難聴のため病院のハードルが高いのは本当で、嫌みという医者もいます。理解のあるお医者さんが、研究報告にあったアプリを使ってくれたら、通いたいです。



芝垣先生からのフィードバック

(1)講演の補足・肉付けする点

この度の研究報告では、「聴覚障害者」という用語をタイトルに使用しました。これは私たちが受諾している厚労省の科研において使用されている用語だからです。実際には、研究報告の中で、中途失聴者よりもろう者の情報保障をメインにお話ししました。この点について、冒頭に十分な説明がなかったため、ここで補足させていただきます。

研究報告後、ろう者、中途失聴者、要約筆記の方など、大変多くの方からご意見をいただきました。12時15分に私の報告が終わったのですが、15時までほぼずっとご意見をいただける状況でした。いただきましたご意見を参考にし、今後の研究に勤んでいきたいと考えおります。ご関心を持っていただき感謝しております。

(2)当事者、支援者等に求めること

最も大切なことは情報保障であり、そしてろう者、中途失聴者の方が、より社会に溶け込めること、つまりより良いコミュニケーションができることだと考えています。この目標に向かってまっすぐ進んでいくことが重要だと考えています。聴者と聞こえない人の双方の理解や歩み寄りが重要になると考えています。私たちの研究対象である医療現場においては、当事者であり、情報源である医療従事者の意識改革はマストであると考えています。人の意識改革はすぐにはできません。教育を通し、イベントを通し、時間をかけて達成度を上げていくことが可能だと考えています。さまざまな機械、AIツールといったものが劇的に状況を改善する可能性があるというイメージをお持ちの方も多いと思いますが、最終的にはツールの出来よりも利用者の意識が鍵となると考えています。

■講演「難聴医療のこれから」～病院としての取り組み～ 京都大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科 総合臨床教育・研修センター 山崎 博司 先生



<講師紹介>

2005年京都大学博士（医学）学位取得。神戸市立医療センター中央市民病院での勤務を経て、2023年より現職。主な研究分野は、耳鼻咽喉科学・ニューロサイエンス。特に先天性難聴や人工内耳装用者における聴覚の発達について研究を進めている。

■内容

難聴には様々なタイプがあり、全く聞こえない場合や小さい声が聞き取りにくい場合、言葉の聞き間違いが多い場合などがあります。特に年齢とともに進行することが多く、症状に気づきにくいことが問題であるという説明をされました。

また、耳鼻咽喉科頭頸部外科学会がホームページで提供する「聞こえのセルフチェック」を活用し、聴力検査を受けることの重要性が強調されました。

その他、人工内耳の紹介、補聴器と人工内耳との併用について解説いただきました。

難聴は全ての世代で問題となりうる症状であり、早期に聴力検査を受け、必要であれば補聴器や人工内耳を活用することで、生活の質を向上させることができます。今回の講演を通じて、難聴に対する理解を深め、周囲の方々にも情報を広めていただければと思います、とまとめがあり講演が終了しました。



参加者感想



◎これから人工内耳を考えておられる方にとっては、補聴器から移行する時期のタイミングや効果について、とても詳しく述べられていました。図解で良く理解出来ました。



◎耳鼻咽喉科医師の話も8030運動の使い方、補聴器を求めるべき時期についての具体的な話があり、良かったです。



◎人工内耳でよく使われるマッピングという言葉を使用しないでの平たいお話は選択肢の一つであることがより明確にだされており、普及もこれまでの積み上げを感じることであり、良かったです。

手話体験ゲーム



飲食・交流スペース



講演会場の様子を配信しました。



個人向けブース

聴力測定や補聴器体験、聞こえに関する相談、企業・大学による機器やアプリの体験をしていただきました。



企業向けブース

令和6年4月1日から事業者による障害のある人への合理的配慮の提供が義務化され、企業のバリアフリー化をサポートする聴覚障害支援機器の体験や、企業における環境整備についてご相談いただきました。



<出展企業一覧>

- 出張聴力測定 / 京都府言語聴覚士会
- Cotopat (コトパット) / 京セラドキュメントソリューションズジャパン株式会社
- VUEVO (ビューボ) / ピクシーダストテクノロジーズ株式会社
- 電話リレーサービス・ヨメテル / 一般財団法人日本財団電話リレーサービス
- SureTalk / ソフトバンク株式会社
- (共同) Sound Display / 情報技術開発株式会社、D-HELO / 岡山大学
- (共同) YY文字起こし / 株式会社アイシン、耳を使わない病院診療サポート / 梶山女学園大学
- 骨導補聴器ADHEAR / メドエルジャパン株式会社
- 補聴器説明・相談 / 補聴器店スマートヒヤリングエイドサービス
- 補聴援助システム「ロジャー」相談・体験 / ソノヴァ・ジャパン (株)
- ミラリスピーカー・ミニ / 株式会社サウンドファン
- Antenna / 富士通株式会社



参加者感想

◎ブースがたくさんあり充実していました。



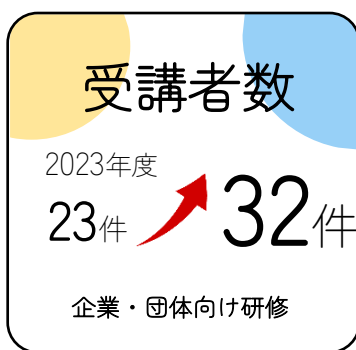
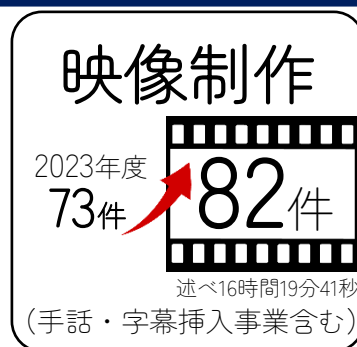
◎新しい機器の開発が進んでいました。当事者やなどの意見を入れて、より普及して活用できる物にしようという流れにあることが分かりました。



◎新しい機器を体験出来た。丁寧に説明していただき良い勉強になりました。

たくさんのご参加、ありがとうございました！

数字で分かる！2024年度の「聞こえに障害のある人もない人も共に暮らしやすい社会づくり事業」



京都府難聴ポータルサイト
KIKOE SUPPORT
きこえ サポート



聞こえに関する情報・コラム
イベント情報など随時掲載中

LINE 公式アカウント



KIKOE SUPPORTの
更新情報など随時配信中！
友だち追加をお願いします

編集後記

2024年度も聞こえとコミュニケーションのサポート事業が無事終了しました。
この事業を担当してから、あっという間に2年が経過したことになります。
京都府全域のサポート委員のみなさまと直接関わりを持つ機会は、まだまだ十分とは言えませんが、当法人の各聴言センターがこれまで担ってきた地域連携の体現が、この事業の大きな要となっています。
この場をお借りして、全ての方々に心より感謝申し上げます。
来年度も、皆様のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

京都府聴覚言語障害センター

京都府聴覚言語障害センターまでご相談ください

- ・社内研修動画への字幕・手話挿入
- ・社内研修（聴覚障害者研修・手話研修・音声認識ソフト導入研修・修正研修など）
- ・雇用された聴覚障害者の手話通訳・文字情報保障派遣など企業の環境整備を行っています
電話リレーサービス法人登録のご相談も賜ります

問い合わせ先：京都府聴覚言語障害センター
〒610-0121城陽市寺田林ノ〇11番64
(電話番号) 0774-30-9000 (FX番号) 0774-55-7708

発行日：2025年5月

発行者：社会福祉法人京都聴覚言語障害者福祉協会 京都府聴覚言語障害センター



社会福祉法人
京都聴覚言語障害者福祉協会

